

# 第51回 北海道の炭鉱出身 『中の島ブルース』への道程

ない、同年代の前川清の姿があったのかもしれない。

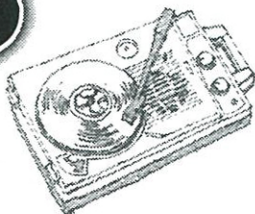
札幌から旭川方面に向かって、車で1時間半ほど行ったところに歌志内うたしという、かつて石炭産業でにぎわった小さな町があります。「心の内に歌を志す」とは、素敵な地名ですね（アイヌ語で「砂の川」を意味する言葉を日本語にあてたもの、とか）。

昭和40年代、閉山が相次ぐ中、炭鉱夫として働いていた仲間が集まって結成されたのが、「秋葉豊とシャネル・フォー」というバンドでした。時代背景から推測してストーンズなどのロックやGSの曲をレパートリーにしていたのではないのでしょうか。閉山による失職を待つより、「歌への志」を胸に抱いて札幌に進出、やがてナイトクラブやキャバレーなどでの活躍が認められる中、長崎の『思案橋ブルース』や『西海ブルース』にあやかり、オリジナル曲を自主制作することになります。

昭和48年、『中の島ブルース』の原型ができあがりますが、リードボーカルの木下あきらは当時25歳、視線の先には、誕生日が20日しか違わ

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いまでも

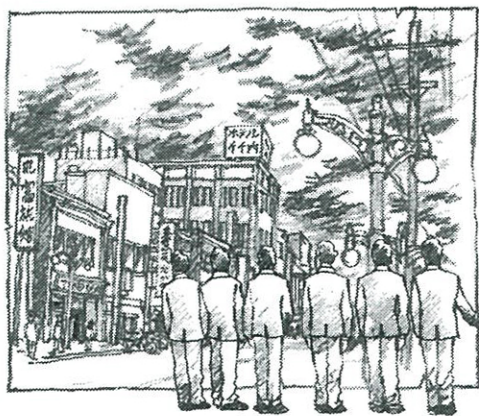


堀井六郎  
絵 松本 浦

あまい口説ことばに泣かされて騙し騙され夜が来る  
ネオン暮らしの女には空も情けも涙街  
ああ ここは札幌  
中の島ブルースよ  
（『中の島ブルース』原詞・須田かつひろ）

右記は1番の歌詞ですが、2番、3番ともすべて「札幌の『中の島』」が強調された歌詞になっています。「中の島」は市営地下鉄で「すすきの」から3駅離れたところのラブホテル街でもありました。男と女の夜の世界をストリートに歌った歌詞の意味を、地元の人や水商売に携わるホステスさんたちはきちんと理解しつつ応援をしたのです。

有線でも人気が広がり、ついにワナー・パイオニアからのデビューが決まり、グループ名も「秋葉豊とアローナイツ」と一新。炭鉱と札幌で鍛えた「ソウル演歌」がいよいよ津軽海峡を越えて全国区人気へと――。



このときこの歌の情報を得たRC Aレコードの関係者が、札幌在住の作曲家・吉田佐了なほ承のうえ、所属のクールファイブ用に歌詞を改変してレコード化を図ります。この改変時に大阪の『中の島』、そして存在しない架空の盛り場、「長崎の『中の島』」が挿入されることになりました。

アローナイツ側は発売直前に方針を転換、クールファイブと同じ歌詞で再レコーディングを敢行。昭和50年7月、札幌「ススキノ」発のご当地オリジナルソングだった歌が、二つのグループが互いの地元を交歓する「日本縦断競争ソング」に変貌した瞬間でした。

結果、知名度にまさるクールファイブ盤が売上で10万枚ほどまきました。が、相乗効果もあって両盤ともヒットし、どちらのグループにとっても代表曲の一つとなりました。当時よりはるかに恰幅のよくなった木下あきらですが、「志」を歌う美声は、いまだ健在です。